

論文審査の要旨(甲)

申請者領域・分野 氏名	総合医療・健康科学領域放射線診断学 氏名 辰尾宗一郎
指導教授氏名	掛田 伸吾
論文審査担当者	主 査 佐藤 温 副 査 田坂 定智 副 査 青木 昌彦
(論文題目) Effectiveness of Cytological Diagnosis with Outer Cannula Washing Solution for Computed Tomography-Guided Needle Biopsy (外筒洗浄液細胞診併用 CT 下生検の有用性)	
(論文審査の要旨) <p>CT 下生検で正診率を上げるために、組織診に穿刺吸引細胞診を併用した方法では、non-coaxial 法を使用するため、2 度の穿刺を要し侵襲が加わることになる。侵襲を増やさず正診率を上げる工夫として、穿刺針の外筒を生理食塩水で洗浄した洗浄液を、細胞診として使用する外筒洗浄液細胞診併用法の有用性を検討した。</p> <p>2016 年 6 月から 2019 年 6 月の間に、当施設で悪性病変を疑い CT 下生検を施行した連続する 109 例を後方視的に解析した。生検手技はすべて non-coaxial 法を使用し、組織診と細胞診は独立した病理医と細胞検査士により評価した。細胞診は 108 例、組織診は 107 例に対し適切な検体が得られた。最終診断は組織学的もしくは臨床的な経過観察でなされ、92 例が悪性、17 例が良性であった。悪性病変 92 例のうち、87 例は併用法で悪性と診断できた。うち、7 例は細胞診でのみ悪性と診断できた。細胞診による悪性病変偽陽性は 3 例（神経線維腫 1 例、IgG4 関連疾患 1 例、胸腺腫 1 例）であった。併用法での偽陰性は 4 例であった。併用法は組織診単独 ($p<0.001$)、細胞診単独 ($p=0.023$) と比べて、有意に正診率が高かった。穿刺針の内針と外筒が別々の場所から検体を採取しているため、細胞診が有用だった症例は、重回帰分析の結果、辺縁率が高いことと有意に関連が見られた ($p=0.003$)。合併症の発生率は細胞診単独、組織診単独、併用法のいずれにおいても同一手技のため、差はなく、すべて保存的に治療された。</p> <p>本研究から、外筒洗浄液細胞診併用 CT 下生検法は、単一の手技で組織診検体と細胞診検体を得ることができ、追加の侵襲手技による合併症を増やさずに診断能を上げる可能性が明らかになった。本手法は多くの臨床現場で活用可能な手法であり、その意義は臨床的に大変重要である。本論文は学位授与に値する。</p>	
公表雑誌等名	Academic Radiology 2022;29(3):388-394